

目標1 「2050年までに、人が身体、脳、空間、時間の制約から解放された社会を実現」



誰もが自在に活躍できるアバター共生社会の実現



プロジェクトマネージャー (PM)

石黒 浩 (大阪大学 大学院基礎工学研究科 教授)

代表機関: 大阪大学

研究開発機関: 大阪大学、金沢大学、九州大学、京都大学、慶應義塾大学、(株)国際電気通信基礎技術研究所、国立精神・神経医療センター、芝浦工業大学、情報通信研究機構、成蹊大学、中央大学、電気通信大学、東京大学、東北大学、名古屋大学、名古屋工業大学、明治大学、理化学研究所、立命館大学

研究開発プロジェクト概要

利用者の反応をみて行動するホスピタリティ豊かな対話行動ができる複数のCAを自在に遠隔操作して、現場に行かなくても多様な社会活動(仕事、教育、医療、日常等)に参画できることを実現します。2050年には、場所の選び方、時間の使い方、人間の能力の拡張において、生活様式が劇的に変革するが、社会とバランスのとれたアバター共生社会を実現します。

2030年までのマイルストーン

【緊急時に多様な人材で、素早く問題解決できる大規模遠隔互助社会の実現】

災害や感染症等の緊急時に、多分野の専門家が多数のCAを並列・協調することによって、直接の支援が難しい現場の被害状況または感染状況を効率よく対話・行動で把握できる。

【多くの専門家に見守られた安心感のある日常生活へ変革】
法律、医療、介護、教育等の専門家が、複数のCAを半自律化・協調することによって、パソコン等の操作が難しい高齢者や障害者等に、いつでもどこでも日常生活に必要なサービス(見守り、健康・医療相談、運動支援、学習支援等)を提供できる。

2025年までのマイルストーン

【主婦・主夫や高齢者等が新たな社会活動に参画できる変革】
公共・商業施設や大阪・関西万博などが集まる場において、主婦・主夫や高齢者や障害者が、CA基盤下で複数のCAを連携・協調することによって、年齢、性別、国籍、障害に応じて利用者に関わりながら、そのニーズを聞いてフレンドリーな(ホスピタリティのある)対話や行動を実現できる。

